



# 虹のかけ橋



第 35 号 / 平成 25 年 3 月



兵庫県立但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

## 「不登校に関する研修会」演習特集

未然防止の視点からの開発的なアプローチ、課題を有する家庭への支援、関係機関との効果的な連携などさまざまな不登校の対応が求められています。そこで、講義や演習を通して、理解を深めるとともに、実践的指導力の向上を図るため「不登校に関する研修会」を行っています。

### 演習 1 「SSWから学ぶ多角的支援」

各教育事務所に配置されているSSWを招き、事例研究を行った。アセスメントシートを利用し、見立てとプランニングを行った後、SSWから助言をいただいた。

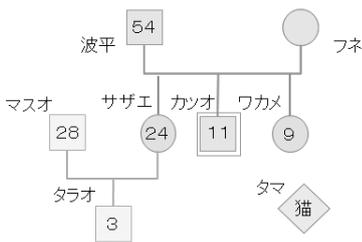
振り返りでは、学校の役割・ケース会議の必要性・SSWの活用などについて意見交換された。

また、「SSWからの助言で、様々なアプローチがあると分かった」「見立て・プランニングの方法が理解できた」といった感想が寄せられた。

アセスメントシートは、①取り巻く環境が視覚的に理解できる②情報が構造的に整理される③書き込むことにより子どもの理解が深まる④チームとしての「見立て」が充実する⑤目標・手立て・役割分担が明記されるなどの利点がある。

### 演習 2 「ジェノグラムを利用したアセスメント」

磯野家のジェノグラム



左図は国民の人気マンガ「サザエさん」の磯野家をジェノグラム(家系図)にしたものである。演習では、ジェノグラムの記入規則を学び、実際に描くとともに、具体的な事例についてアセスメントをして、それを班ごとにシェアリングした。さらに、エコマップ(生態地図)の活用についての研修にも取り組んだ。

- ・ジェノグラムは家族関係・家族歴が視覚的に理解できる。特に、事象の世代間継承についての把握がしやすい。
- ・エコマップにすることで、学校や関係機関の役割がわかる。
- ・チームで対応する場合に、共通理解を図るためのツールとして、ジェノグラムやエコマップは有効である。

### 演習 3 「ブリーフセラピーで面談が変わる」

ブリーフセラピーとは、その子の持っているリソース(長所や良い面)に目を向け、「問題追及」から「解決志向」に発想の転換を図るカウンセリングの方法の1つである。

そのポイントとしては、次のようなことが上げられる。

- ・リソースを探すとともに、その有効な活用について考える。
- ・本人や家族からリソースを引き出す。
- ・問題を本人からきり離し、外在化する。

「できるだけ多くのリソースを見つけることが大切」「ロールプレイを通して短所を長所と捉えることの重要性に気づかされた」などの感想が寄せられた。

問題点ではなく肯定的に焦点を当てる



・解決および未来を志向する



# エンカウンターで不登校対応が変わる（Ⅱ）

環太平洋大学教授 住本 克彦

## 1 「心の問題」への対処手順

筆者は、今、公立学校でスクールカウンセラーも務めているが、多くの面接の中で、不登校支援の面接がやはり中心になっている。不登校支援に限らず、心の問題への対処としては、以下の手順を踏んでいる。

- (1) リレーション（信頼関係）の形成
- (2) 問題の整理（課題の明確化・焦点化）
- (3) 現実への応用（折り合いの付け方の実践学習）



## 2 不登校支援プログラムの実際

今号では、具体的な不登校支援プログラムを提示する。不登校支援プログラムは、以下の6種類のエクササイズで構成されている。

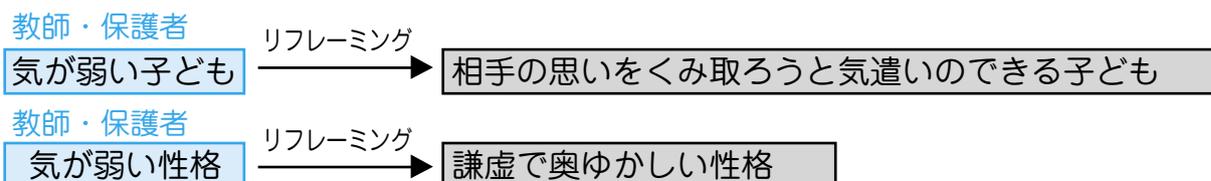
- (1) 保護者・教師の「ねばならない」を変える
- (2) 子どもへの接し方に介入する
- (3) 自己肯定感を高める
- (4) 再登校に挑戦する
- (5) 新たな自分を生きる
- (6) クラスでできる不登校予防



次にそれぞれのエクササイズを挙げる。

### (1) 保護者・教師の「ねばならない」を変えるエクササイズ：『リフレーミング』

リフレーミングとは、物事の見方の枠組みを変えさせることで、「不登校を起こしていることも意味がある」と考えさせ、不登校児童生徒への柔軟なかかわりを探ろうとするものである。不登校児童生徒への支援をする保護者、教師、さらには本人のプラス思考を促進することにつながるエクササイズである。



### (2) 子どもへの接し方に介入するエクササイズ：『家庭訪問の予行練習』

「家庭訪問の予行練習」をすることで、教師が、家庭訪問の時に子どもに起こる感情に気づき、自身の口調や言い方が子どもに与える印象について、事前に考える場とするものである。そして本エクササイズ実施によって、教師が、保護者とのリレーションづくりのポイントを、体験を通して学ぶのである。特に、教師が子ども役、保護者役になってロールプレイングを行い、「この

一言は、本人にとって登校刺激が強すぎるよな」「もっと、保護者をねぎらうことが大切だったな」等の気づきを大切にしたいものである。

### (3) 自己肯定感を高めるエクササイズ：『私の好きなこと』

「私の好きなこと」を振り返らせることにより、自分自身のよさや努力していることに注目させ、自尊感情を高めさせる。また、他者と好きなことを語り合う中で、人間関係の良さも実感させる。なお、不登校児童生徒は自信をなくしている場合が多いので、教師は、「それってすごいね!」「詳しいんだね!」等の言葉かけで、積極的に支持していくことが大切である。このエクササイズを体験した児童生徒からは、「自分が好きなことはこれからも大切にしていきたい」「Aさんと同じ趣味だとわかった。また今度はいろいろと話したい」等の感想も多い。



### (4) 再登校に挑戦するエクササイズ：『私のお願いを聞いて』

自信をなくしている不登校児童生徒が、勇気を持って自己主張する体験をすることで、自分の思いを相手に伝える意欲を高めるエクササイズである。再登校に向け動き始めたころに実施すると、より効果が上がる。教師のデモンストレーション後、二人組で、お願いする立場とお願いされる立場に分かれて、ロールプレイングによって実施する。このエクササイズの体験後、「がんばり通せた自分自身をほめたい」「都合が悪くて依頼を断るときは、今日のように断ってもいいのかな、と思えた」等の児童生徒の感想も多い。

### (5) 新たな自分を生きるためのエクササイズ：『私の人生の振り返り』

このエクササイズは、過去の自分を振り返らせることで、自己を再発見させたり、新たな自分を生きようとする意欲を持たせたりするものである。

・実施時期は、学校復帰後、友人関係も回復し、自己主張も向上してきた頃が好ましい。

つらかった振り返りをする場合や、マイナス思考が強い児童生徒が出てきた場合

個別の声かけ



いろいろな経験をしながらも、今ここまで回復した自分のすばらしさを認め、これからも自信を持って生きていこうとする思いを持たせる

### (6) クラスでできる不登校予防のエクササイズ：『ほめあげ大会』



これは、自分が今まで気づかなかった良いところやがんばっているところを、教師や友だち、保護者からの声かけで認めもらうことで、自分に自信を持たせるエクササイズである。なお、実施前に、「ほめ言葉集め」「言われてうれしかった言葉集め」などを実施しておくこと、友だちのがんばりや良さなどをほめるときの観点となり、エクササイズに見通しを持たせることにつながる。不登校支援のキーワードである、自尊感情を高めるのに大変有効なエクササイズの一つである。

以上、今号では、具体的な不登校支援プログラムを提示させていただいた。詳細については、『エンカウンターで不登校対応が変わる』（國分康孝・久子監修、片野・川端・住本・山下編集、図書文化社、2010）をぜひ参考にしてほしい。ただ、実践する際に留意していただきたいのは、スキルはあくまでスキルにしか過ぎないということである。目の前の子どもたちの心に寄り添ったスキルの展開を心がけていただきたい。

# 「学校復帰につながる要因の調査研究」について

但馬やまびこの郷では、当所を利用する児童生徒の調査を実施することにより、学校復帰につながる要因を分析し、効果的な支援策について研究を進めています。不登校状況の「改善の有無」については、約9割の方が改善につながったと答えています。

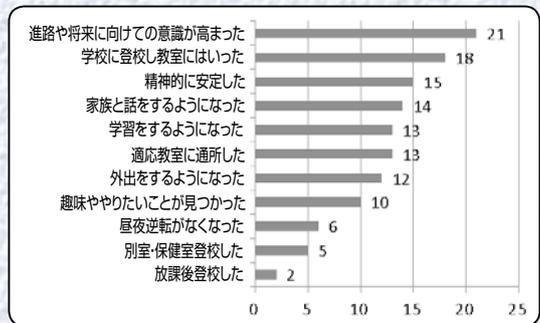
今回は、その改善の内容と効果的なかかわりや事柄についてまとめてみました。

## 1 改善の内容について

「進路や将来に向けての意識が高まった」が一番多い。「学習」、「趣味ややりたいこと」などの回答も含め、本人にとっての目標が見つかったと、エネルギーが生まれ、行動を喚起するものと考えられる。

また、「精神的に安定した」「家族と話をするようになった」も多く、精神面での改善が大きいことが伺える。

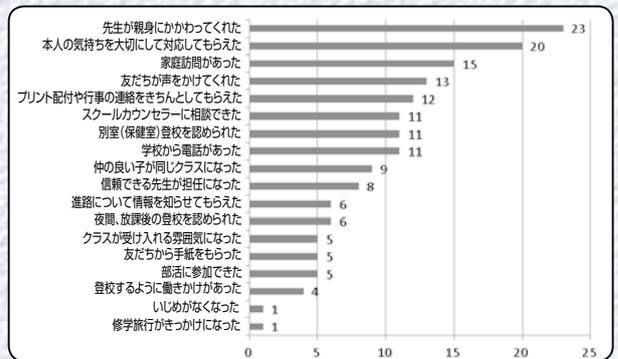
こうした子どもや家庭の変容が、「登校し教室に入った」「適応教室に通所した」などの具体的な行動につながったものと思われる。



## 2 改善につながったと思われるかかわりや事柄（学校）

「先生が親身になってかかわってくれた」が最も多い。学校に行けない子どもや保護者は、何よりも人との心のつながりを求めており、先生の熱意が子や親に伝わったものと思われる。

次に、「本人の気持ちを大切にしてお対応してもらえた」が続いている。学校としての規律やきまりを踏まえながらも、まずは本人の気持ちを大切に、自己選択・決定できる機会をつくることで、自己肯定感を高め、本人の変容を促すことにつながると考えられる。

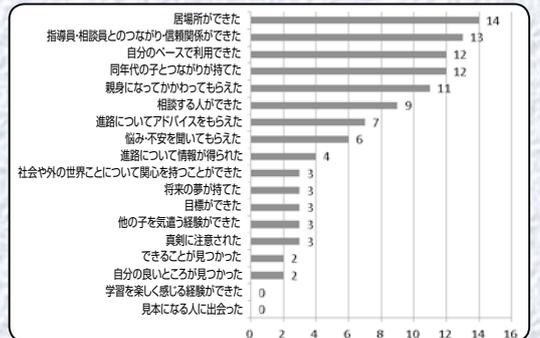


## 3 改善につながったと思われるかかわりや事柄（適応教室・フリースクール）

「居場所ができた」が一番多く、次に「指導員・相談員とのつながり・信頼関係ができた」「同世代の子とつながりが持てた」が多い。

不登校になると、家から出ることが少なくなり、人との交流も限られていく。こうした状況の中で、家庭以外の「場」と「人」の存在は大きな意味を持つ。

安心して過ごせる居場所があり、家族以外につながる人がある適応教室やフリースクールは、次の一歩を踏み出すきっかけがえのない空間なのである。



### 学校復帰のポイント

- 人との関係性をつくる体験をする
  - ・教師、スタッフ、相談員、SCなど信頼できる人の獲得が精神的な安定につながる。
  - ・同世代の子とのつながりが大きな自信となる。
- 目標を持つ
  - ・将来、進路、趣味、やってみたい事ができるとエネルギーが生まれる。
- 自己選択・自己決定する
  - ・子どもの意思表示を重視することで、自尊感情が育まれる。
- 居場所が広がる
  - ・居場所が、家庭からやまびこの郷、適応教室、その他に広がることが社会的自立につながる。